

知っておこう!

健康診断の

監修:石川 隆氏
丸の内クリニック 院長



第18回

ウン?・ホント! 乳がん検診

会社員の健(タケン)さんの妻、康子(ヤスコ)さんの40歳になる姉は乳がん検診でどの検査を受ければいいのか迷っています。今回は乳がん検診について考えてみましょう。

1 乳がん検診は「マンモグラフィ検査」が標準的な検査?

姉が会社の健康診断で乳がん検診を受けるらしいの。“マンモグラフィ検査”と“乳房超音波検査”があるけれど、どちらがいいのかしら?



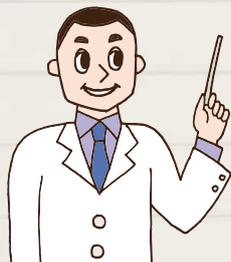
ヤスコ
康子さん
主婦(35歳)



日本の厚生労働省が推奨するガイドラインでは、40歳以上なら“マンモグラフィ検査”を2年に1回受けることを勧めているよ



タケン
健さん
会社員(40歳)



マンモグラフィ検査は、乳腺専用のX線装置を用いたレントゲン検査です。乳房を片側ずつ、上下あるいは左右から圧迫して、薄く平らにして撮影します。通常、片側2方向撮ります。これまでの厚生労働省の乳がん検診のガイドラインでは、40歳以上では2年

に1回のマンモグラフィと医師による視触診(医師による乳房やわきの下をみたり、触ることによる診察)を推奨とされていました。しかし国立がん研究センターが2013年9月にガイドラインの改訂案を公表し、医師による視触診は必ずしも必須でなく、マンモグラフィ単独でもよいとしました。

これはマンモグラフィにより、医師の視触診ではわからない早期がんの発見が可能であることが明確になったための結果といえます。実際マンモグラフィで発見される乳がんの70%以上は早期がんで、乳房温存手術を受けることができる段階でみつかっています。一方、全国

の自治体で視触診を実施する医師の確保が困難となり、乳がん検診の受診率の向上がみられなかったという事情もあります。

マンモグラフィによる乳がん検診は、乳がん死亡率を減らすという意味で、有効であることが科学的に確認されています。マンモグラフィでの放射線量は実効線量で0.05~0.36ミリシーベルト(mSV)と少なく、乳房を中心とした狭い範囲にしかX線を照射しませんので被曝のリスクは極めて少ないと考えられています¹⁾。

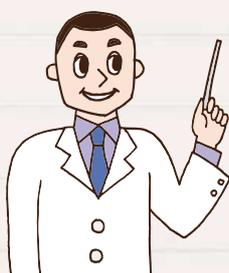
多くの先進諸国では、マンモグラフィ検査が推奨されており、アメリカでは40歳から64歳の女性の50%が、イギリスでは50歳から70歳の女性の70%以上がマンモグラフィ検査を受診しています。その結果、アメリカやイギリスでは、乳がん発生率が増加しているにもかかわらず、乳がん死亡率は減少し続けています(図1)。わが国では、40歳以上のマンモグラフィや乳房超音波(エコー)による乳がん検診の受診率は20%程度です。この結果、わが国では乳がん発生率が増加し、それに比例する形で乳がん死亡率も増加し続けています。

「乳房超音波検査」はどのようなときに 検診で選択したらいいの？

じゃあ、「乳房超音波検査」
はどんなときに検診で
選択したらよいかしら？



“乳房超音波検査”は
マンモグラフィに比べると
死亡率を減らすという
確証が得られていないんだ。
でも、マンモグラフィで
みえにくいタイプや若い人の
スクリーニングは有用らしいよ



乳房超音波検査は診察台の上
に仰向けになり、皮膚にゼリーを
塗って、プローブ(端子)をあて、
乳房の内部を超音波で観察する
エコー検査です。痛みや、体への
負担はほとんどありません。放射
線を使いませんので、被曝のリス
クもなく時間的にも10数分くら

いで終了します。

日本人の50歳未満の女性では「高濃度乳腺」といって乳
腺の量が多く、マンモグラフィ検査では正常乳腺自体が白
く写って腫瘍が隠れてしまい、乳がんの診断ができない
ことがしばしばあります。「高濃度乳腺」の人は一般的には
月経のある人です。乳腺組織は年齢とともに脂肪に置き
かわりますが、出産・授乳歴などにも影響されるため、年
齢だけでは一概にいえず、個人差があります。40歳未満

の人ではさらに乳腺の発達がよく「高濃度乳腺」の場合
が高まるため、乳がんの人が近親者にいない40歳未満では、
マンモグラフィよりも乳房超音波が選択肢の一つとして考
えられます。

乳房超音波検査は今のところ、検査法や読影の技術、
機械の仕様がマンモグラフィと比べ十分に標準化されてい
ません。検査をする技師や医師の経験や技量によって、腫
瘍や病変などを描出する能力に差が生じることがあります。
また、乳房超音波検査が死亡率を下げるためにどれだけ
有効なのか、まだ科学的に検証されていず現在疫学
研究が進行中です。

一方マンモグラフィ検査で腫瘍性病変として診断され
なかった小腫瘍が、乳房超音波検査で乳がんの疑いと診
断される場合もあります。

乳がん検診はマンモグラフィ検査が基本ですが、40歳
以上では2年に1回の検査が推奨されています。乳房超音
波検査もまだ科学的根拠が十分なデータはそろっていま
せんが、マンモグラフィで診断されにくい乳がんの診断に
有用な場合があることがわかってきました。40歳でマン
モグラフィ検査と乳房超音波検査および医師の視触診を
受け、その後は1年ごとにマンモグラフィ検査と乳房超音
波検査を交互に受けていくというのも一つの考え方と思
われます。

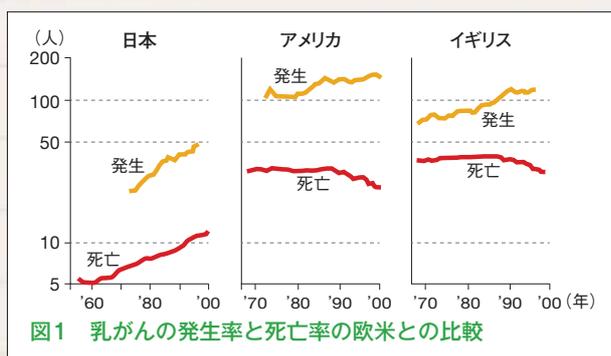


図1 乳がんの発生率と死亡率の欧米との比較

文献2)より

参考文献:1) マンモグラフィによる乳がん検診の手引き—精度管理マニュアル第5版
精度管理マニュアル作成に関する委員会監修、大内恵明編集 日本医事新
新報社 2011年
2) 国立がん研究センター がん対策情報センター がん情報サービス
http://ganjoho.jp/public/pre_scr/screening/breast_cancer.html

Mini Column

乳がんの疫学

わが国では、1年間におよそ53,000人の女性が乳がんと診断されてい
ます。このことは、胃がん、大腸がんと並んで、女性に最も多いがんの
一つであることを示しています。乳がんの特徴は、40歳から50歳代の
女性に特に多くみられることです(図2)。また、40歳から50歳代の乳
がん発生率は、この20年間で約2倍に増加しています。一方、乳がん
で亡くなる女性は1年間に12,000人で、40歳から50歳代の女性にお
けるがん死亡の25%を占めており、この年代の女性にとって最も多い
がん死亡原因となっています。

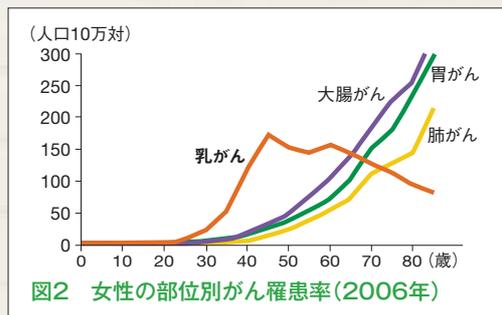


図2 女性の部位別がん罹患率(2006年)

文献2)より